イザヤ書 40 章 27-31 節 「待ち望む者への力」

1A 疲れた者の訴え 27
2A 永遠の創造主 28－29
3A 主を待ち望む者 30－31

本文

イザヤ書 40 章 27 節を開いてください。私たちの聖書通読の学びはついに、イザヤ書 40 章に入ります。午後に 40 章から 42 章前半まで読んでみたいと思いますが、今朝は 27 節から 31 節に注目してみたいと思います。「27 ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」主が、疲れてしまっているイスラエルの民に慰めと励ましを与えている言葉です。

イザヤ書は、それ自体で聖書全体を示していると言われています。聖書に啓示されている神の救いのご計画全体を示していると言われています。全体で 66 章ありますが、前半部分が 1 章から 39 章まで 39 章分あります。後半が 40 章から 66 章までで 27 章分あります。聖書は 66 巻ありまして、旧約聖書が 39 巻、新約聖書が 27 巻あります。数がたまたま同じなんですね。けれども大事なのは内容です。前半部分には、他のものに拠り頼むイスラエルに対して神が叱責している言葉を読んできました。慰めの言葉もありましたが、叱責している言葉が前面に出てきます。しかし、後半は 40 章 1 節にあるように、「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」というのが主題です。すでに痛めつけられた民に対して主が慰めを与える言葉に満ちています。

そして 40 章以降の後半は、まるで福音書を読んでいるかのような錯覚を覚えます。「荒野に呼ばわる者の声がする。（3 節）」とありますが、バプテスマのヨハネの登場をもって四つの福音書は始めています。そしてこのイザヤの言葉がバプテスマのヨハネをもって成就したことを述べています。主が到来して神の国をこの地上に立てられるという終末の幻を描きながら、僕として来られるキリストの初めに来られる姿を鮮やかに預言しているのです。その慰めの言葉の一部が今、読んだ 40 章 27 節から 31 節の言葉です。

歴史的背景としては、前半部分が紀元前 701 年にエルサレムがアッシリヤから救われたことがありましたが、後半の 40 章以降は、紀元前 539 年にペルシヤによって、バビロンに囚われの身になっていたユダヤ人たちがエルサレムに帰還することができるようになったことがあります。イザ

ヤは死ぬ前に、おそらく紀元前 680 年とか 690 年とか、死ぬ前にこの預言を伝えたのだと思われます。ユダの国はアッシリヤからは救われましたが、紀元前 586 年にバビロンによって滅ぼされます。しかしペルシヤによってバビロンが滅ぼされ、そこにいたユダヤ人がエルサレムに帰還する布告を、ペルシヤの王クロスによって出されるのです。そして帰還する彼らのことを思って、イザヤが主の御霊によって 40 章以降の言葉を語ります。その出来事が起こる約 150 年前のことです。

1A 疲れた者の訴え 27

27 節は、「ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。」という言葉から始まります。ヤコブよ、イスラエルよ、という呼びかけには、「あなたは知っているはずではないか。あなたは、わたしに選ばれて、わたしから教えを受けた者たちではないか。」という思いが暗に含まれています。私たち、キリストにあって神の民とされた信仰者も、神を知っているはずなのに、彼らと同じ思いになることがあります。

それは疲れてしまうことです。自分が信仰生活を歩んでいる中で、疲れてしまうことがあります。主のための働きをしている中でも疲れます。ユダの民は、バビロンの中でその圧政の中で苦しんでいました。そして、詩篇の中に多く見られるように、主に対して彼らを裁いてくださいという祈りを捧げています。けれども、一向にその兆しが見えません。それで自分の霊が疲れて、弱ってしまっています。その時の気持ちを彼らはこう表現しました。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」自分のこの辛い部分は、主に隠されたままではないのか。主が関わってくださっているようには見えない。また、自分は正しい訴えをしているのに、一向に変わる気配はない。主に見過ごされているのだ、と感じたのです。

なぜ私たちの霊は、疲れてしまうのでしょうか？一つに、ユダの民がそうであったように、「人々の反抗」を見るためです。主の正義が広がった環境で生きていくことを願っているのに、人々が神に反抗してそのために、自分の義に飢え渇く霊が疲れてしまいます。職場の中で、家庭の中で、また教会においても信者の中にある肉の問題によって、人々の抵抗に遭い、疲れてしまうのです。福音宣教をしている時は特にそうでしょう。反対に遭わない宣教は、聖書には約束されていません。それで、人々の頑なさを見て、疲れてしまうのです。

ヘブル書の著者は、迫害に継続的に受けていたために、キリストにある情熱が薄れて、元のユダヤ教徒としての生活に戻りかけていた信者たちに警告をしていました。イエスから目を離さないでいなさいと言いました。特に十字架の道に向かうイエスから目を離さないでいなさい、そしてこう言いました。「12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」主のすぐそばにいることが大切ですね。

そして、人々の反抗だけではありません。私たちが疲れてしまうのは、私たち自身の中にある反抗心、神に反抗してしまう肉の問題です。どんなに努力しても、どうしても同じ罪の中に陥ってしまう。もうこれは打ち勝つことができないのではないか？と思って自分に失望してしまうのです。しかし、主は私たちを刷新してくださいます。新たな力を与えてくださいます。40 章の始まりが、そのことを宣言しています。2 節をご覧ください、「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」労苦は終わったと主は宣言されます。この「労苦」は戦い、とも約束ことができます。彼らが神に反抗していたその罪は終わった、その咎は償われたと言ってくださるのです。その罪に対して二倍の慰めがあると宣言してくださっています。そして 40 章以降には、主のしもべたるキリストの姿が出てきて、その罪の贖いをご自身の体に傷を負って成し遂げてくださることが書いてあります。

イエス・キリストが来られました。この方が来られたのは、世の罪を取り除くためです。私の罪、この罪がいかに自分を縛っていたとしても、それでも十字架に付けられたキリストの血と、そして死に打ち勝ったその力によって、その縄目を取り除くことができるのです。「コロサイ 2:11-12 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」どうか、この言葉で慰めを受けてください。キリストを復活させた神の力が、信じる者に働き、罪の力に打ち勝たせてくださるのです。

2A 永遠の創造主 28－29

そして、自分の道は主に隠されている、私の正しい訴えは見過ごされていると言い張っていることに対して、答えています。「28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」

ここに至るまで、主はイザヤによってご自身が永遠の神であることを示されました。21 節に、「あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかったのか。」とあります。初めに地の基が造られた時にすでに主はおられました。そして、その初めの時から主は、偉大な知恵をもって、全ての人々を支える基を作ることがおできになりました。

そのことを考えますと、私たちが疲れてしまう一つの原因を克服することができます。主は、私たちの知らない過去というものはない、ということです。自分が今の自分になっている過去の歴史があります。それに対する負い目があるかもしれません。人と話す時に、どうしても乗り越えられない限界があります。それは、その人が自分の過去を知らないからです。「あなたに、何が分かるのですか？私が通ってきた生い立ちを知らないから、そんなことが言えるのですよ。」と言ってしまうのです。しかし、そのことを私たちの主に投影させてはいけないのです。主は人ではないのです。

もし主がそのような方なのだと断定するならば、その方はもはや、聖書の神ではありません。神は初めから私たちを知っておられるのです。そして、初めから私たちに計画を持っておられるのです。「けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が（ガラテヤ 1:15）」とあります。そして驚くことに、「エペソ 1:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と言っています。」少し思いめぐらしてみましょう、私たちがここにいるのは、そしてキリスト者になっているのは、神が既に地の基意を置かれる前からそのようにしようと思っておられた、のであります。

そして、主は「地の果てまで創造された方」であります。永遠であれば、神の知らない時はないのですが、地の果てまで創造しておられるのであれば、神の知らない所はない、ということになります。これも、私たちの霊が疲れてしまう原因となるものです。つまり、「私のこの状況は、どんな人でも分かることはできないだろう。」ということです。人に知ってもらおう、そして慰めを受けようと思えば思うほど、人々から誤解される、酷ければ裁かれてしまいます。自分が人々から遠く離れてしまっているのではないか、と思うのです。しかし、主は自分がどんなに人々から疎外されていると思っても、そのような状況にあると言っても、そこにも主はおられます。なぜなら地の果てまで創造されたからです。

しかも、「創造された」という言葉にも注目してください。主はどこにでもおらえるだけでなく、すべてのところを創造されました。実にあなたご自身を、力強い御手で造り出されました。ですから、主はその状況を知っておられるだけでなく、すべてを掌握されているのです。その状況を良い目的で造られたのは神ご自身なのです。

イザヤの預言では、40 章 12 節から創造主としての偉大さを預言しています。「12 だれが、手のひらで水を量り、手の幅で天を推し量り、地のちりを枡に盛り、山をてんびんで量り、丘をはかりで量ったのか。13 だれが主の霊を推し量り、主の顧問として教えたのか。14 主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。15 見よ。国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。見よ。主は島々を細かいちりのように取り上げる。16 レバノンも、たきぎにするには、足りない、その獣も、全焼のいけにえにするには、足りない。17 すべての国々も主の前では無いに等しく、主にとってはむなしく形もないものとみなされる。18 あなたがたは、神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか。」いかがですか、主の偉大な力とその知恵がこれほどのものであったのです。島々が細かい塵のようにみなされているのですから、この日本は、私たちの肉眼で見ることのできないほどの小さな埃です！

しかし、私たちはどうしても、自分の限界を神に投影してしまうことになります。人の知恵や力、その行なった業績、これらのもので私たちは生きています。それをあからさまに表しているのが、木や石で作った偶像です。それらは神と呼ばれていますが、実は人の造った業です。人の造った

業が救いなのだ、と教えているのです。そうした中に取り囲まれて生きていますので、神を信じて生きている私たちの霊は疲れてしまうのです。そして私たち自身も影響を受けて、自分の限界を神に投影してしまいます。しかし今、呼びかけているのです。「見よ。あなたがたの神を。(40:9)」この神は力をもって来られます。その御腕で統べ治められます(10 節)。

そして、その結果として、「29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。」と言っています。神の永遠に触れ、また神の全てを造られた創造に触れる時に、その人は力を得ます。また活気が与えられます。新たな力が与えられます。

<u>**3A 主を待ち望む者 30－31**</u>

それから、「30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。」と言っています。若者、また若い男は自然に力があり、活気のある者たちの代表です。新共同訳では「若い男」は「勇士」と訳されています。そういった活気に満ちる彼らが、疲れ、たゆみ、そしてつまずき倒れます。これが現実です。ところで、「疲れて、たゆむ」とはどういう状態でしょうか？「ああ、もうこのことには疲れた、もうこのことについてはどうでもいいや。」と言って、怠けていくようになるということです。マラキ書には、祭司たちが汚れたパンを捧げ、欠陥のある動物を祭壇に捧げている祭司たちの姿が描かれていますが、それは、「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。(1:2)」と、神の選びの愛について分からなくなっていたからです。このように神の生きた力が見えなくなって、疲れ、たゆみ、それからついに、神から離れていくという、つまずきにまで至ります。

私たちは、自分の内にある力で何とか生きていこうとします。力があり活気がある人ほど、自分が疲れ、たゆみ、つまずき倒れる、か弱い存在であることに気づきません。ペテロが、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」と言ったところ、イエス様は、「マタイ 26:34 まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」と言われました。彼の力や精力はそこまでしかなかったのです。それで彼は、つまずいてしまいます。イエス様は、ご自分が復活されてからペテロに言われました。「ヨハネ 21:18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」若い時は自分の行きたいところに行きました。しかし年を取る時は、自分の活力ではなく、主になされるままに身をゆだねるので、彼は最後まで信仰を貫くことができました。

そして、最も大事な言葉が 31 節です。「31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」しかし、と言っています。若い者でさえ、疲れ、たゆみ、つまずきます。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得ます。

「待ち望む」という言葉が鍵です。日本にいるある宣教師が、「日本語の訳はとても良い」と言っ

ていました。英語ですと、”Wait on the Lord”と、ただ「主を待つ」としか書いていないからです。けれども、元の言語のヘブル語では、この日本語訳のようになっています。単に待つだけではありません。待って望むという意味合いがあります。待ち望むことは、消極的な態度ではありません。自分の今の必要に対して、主を自分の望みとしていることです。それを持続的に行なうことです。状況がそのように見えない時でも、見ているかのように信仰を働かせて望んでいることです。忍耐をフルに、完全に働かせます。そうすると、新たな力が与えられます。

多くの人は、主に導きを求めます。しかし主は、ご自身に導きを求めるだけでなく、私たちが力を受けることを待っていてほしいと願っておられます。「主よ、これこれのことを示してください。」という祈りは捧げるのですが、示された後はそのまま自分でそれを行おうとしてしまうのです。モーセが四十歳の時、エジプト人からイスラエル人を救おうとしてエジプト人を殺してしまいました。けれども、イスラエル人はモーセを信頼するどころか、疑っていました。導きは得ていたのですが、力を受けていなかったのです。だから、主を待ち望むことが必要ですが、これが踏ん張りどころなのです。信仰をもって待っている状態は、いろんなことをしたい心にはとても辛いことです。しかし、待つのです。そうすると、主から導きが与えられるだけでなく、力も与えられます。

そして日本語訳のように、私たちは待ちながら、望んでいます。多くの人が、ただ待っているか、あるいは、ただ望んでいるかのどちらかしか行なわないでいます。ただ待っているのは、ちょうど待合室にいて、じっとしているような状態です。何もしないでいる状態です。「神が与えてくださる時があるんでしょ。ならば、それまでは特に主に対して熱心にならなければいいじゃない。」と言って、神に関する事柄ではなく自分のことをやっていようと思っていることです。そうではありません、待ち望むことは、いつでも何かが起これば行動に移してしまう、そのような期待や望みがあるのです。ちょうどそれは、放蕩息子の父親のようでありjます。彼は待っていました。けれども、毎日、息子が戻ってくるのではないかと期待していました。なぜなら、「彼が戻ってきた時に、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。(ルカ15:20)」とあるからです。

そして、待たないで望んでいる人たちも多いです。それは、いろいろなことを望みます。主のために何かを行いたいと願います。それでいろいろ計画を立てるのですが、計画倒れになります。それでいろいろ主のことをしたいと願っていても、何一つできていない状態が続いています。なぜでしょうか?「待っていない」からです。忍耐して待たないからです。主に対して望みを抱くことは正しいのですが、事を行われるのは主であり、主は熱心に待つことを願っておられるからです。けれども、事がうまくいかないとあきらめてしまいます。それで、主が待ちなさいと言われていることをしていないので、主がなされようとしていることができないのです。

けれども、主を待って、主に望みを抱いていると、「新たな力」を得ます。これは、古い着物を脱いで、新しい服を身に付けるような気持ちであります。後ろのものを忘れて、前のものに向かって

進む力になります（ピリピ 3:13）。力が刷新されるのです。

そして、それは「鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」とあります。鷲のように翼をかって上ることと、走る、歩くことがいっしょに書かれています。ここが味噌です。いつも歩いているわけではありません。いつも走るわけではありません。歩いている時に、「こんなのろのろしているので飽きてきた」ということはないし、走っていて、「こんなせかせかしているのは辛いよ。」と言って、自分で作為的に休息を取ることもないのです。なぜか？風の吹くままに翼をかっているからです。

なぜ、ここで鷲なのか？聖書には、雀も出てきます。雀と鷲の飛び方の違いは何でしょう？そうです、翼をばたばたさせないのが鷲です。雀は、一秒に何度もばたつかせて飛んでいます。しかし、飛行時間はどう見ても、鷲のほうです。なぜこの違いが出てくるのでしょうか？鷲は、風の流れを知っているからです。自分で飛んでいるのではありません。その流れに翼を合わせて、それで飛んでいるのです。その風の流れとは、すなわち御霊の流れです。主がすでに吹かせておられる御霊の流れに、そのまま乗るだけなのです。

私が見て圧巻だったのは、ガリラヤ湖畔のガムラというところです。ガリラヤ湖には、福音書にも出てくるように強い風が吹くことが多いです。その風に乗っているのですが、鷲はまるで動いていません。空中に浮いているように飛んでいます。風に乗っているんですね。ですから、歩いているどころか、立ち止まっていても、それでも大丈夫なのです。これが、主を待ち望む者の姿なのです。これから何かをするのではありません。大事なのは、主が既に何を行なわれているのか、その御霊の動きを察知することです。

27節、正しい訴え
疲れ
　人々の反抗
　自分自身の罪（40:2）
　持続的な苦しみ（病など）
永遠の神
　知られていない時がない
　私がここまで来たのを、あなたは知らないから。
地の果てまで
　知られていない場所がない
　他の人々が通っていない部分がある
創造された
　主は知っておられるだけではない、力強い御手であなたを造り上げられた。
30節
　若者、若い男　自然に備わる力のある者たち
「疲れ、たゆみ」
「つまずき倒れる」
　ペテロのイエス様への献身、「わたしから離れては・・」、若いころは行きたいところに、・・ヨハネ
31節

「新しく」これまでの神のご性質から、その力から、
「鷲のように」

2コリント1章　慰め
ヨハネ14章　慰め主　イエスのご臨在を難しい時に与えてくださる。
パウロ　エルサレムでの伝道
神の民は、この世に生きるのは落ち込ませてしまう。
罪を赦された、イエス・キリストが罪を取り除かれた。神が勝利された。
どのように、「神のみことばにある約束」。「見よ、あなたがたの神を」。力強く、しかし優しく。
神の偉大さ、その創造、知恵。
国々の小ささ、バビロンなどの異教の国の力。
偶像、自分のやり方、自分の力や知恵で何とかやりくりしようとしている。偶像がその最も典型的な姿。
For apart from the God who reveals himself in Holy Scripture, people are confined to their own thoughts, imaginings and devisings, a truth most plainly seen in the making of

an idol.[1]

The word "wait" does not suggest that we sit around and do nothing. It means "to hope," to look to God for all that we need (Isa. 26:3; 30:15). This involves meditating on His character and His promises, praying, and seeking to glorify Him.

The word "renew" means "to exchange," as taking off old clothes and putting on new. We exchange our weakness for His power (2 Cor. 12:1–10). As we wait before Him, God enables us to soar when there is a crisis, to run when the challenges are many, and to walk faithfully in the day-by-day demands of life. *It is much harder to walk in the ordinary pressures of life than to fly like the eagle in a time of crisis*.

"I can plod," said William Carey, the father of modern missions. "That is my only genius. I can persevere in any definite pursuit. To this I owe everything."[2]

Hope (with, of course, its biblical component of certainty) is one meaning of √*qāwâ*, which also means 'wait' (patiently) and 'rest' (trustfully)[3]

קָוָה (*qāwâ*) **I,** ***wait, look for, hope.***

This root means to wait or to look for with eager expectation. It is used for the wicked who make an attempt to destroy the life of the righteous (Ps 56:6 [H 7]; 119:95). Waiting with steadfast endurance is a great expression of faith. It means enduring patiently in confident hope that God will decisively act for the salvation of his people (Gen 49:18).[4]

A. God is willing to make these resources available to you.

1. When you get weary and begin to faint, He is willing to hold you up.
2. When the temptation gets heavy and you start to fail, He will deliver you.
3. When your future is confused and you don't know where to turn, He will guide you.

---

[1] Motyer, J. A. (1999). *Isaiah: an introduction and commentary* (Vol. 20, p. 280). Downers Grove, IL: InterVarsity Press.

[2] Wiersbe, W. W. (1996). *Be Comforted* (pp. 110–111). Wheaton, IL: Victor Books.

[3] Motyer, J. A. (1999). *Isaiah: an introduction and commentary* (Vol. 20, p. 283). Downers Grove, IL: InterVarsity Press.

[4] Hartley, J. E. (1999). 1994 קָוָה. R. L. Harris, G. L. Archer Jr., & B. K. Waltke (Eds.), *Theological Wordbook of the Old Testament* (electronic ed., p. 791). Chicago: Moody Press.

4. When your problems overwhelm you, He will counsel.
5. When there seems to be no way out, you are tired of fighting the tide and you begin to sink, you put the traditional last hand up as you go under, He will grab that hand. [5]

「待ち望む」とてもすばらしい翻訳。ただ「待つ」のではない。信じて忍耐している、主のご性質や約束に心を留め、祈り、主に栄光を帰することを求める。そして「望む」だけではない、主にあって望むが、それをすぐにあきらめる。待たない、その忍耐がない。

41 章
「恐れるな」
　自分の負い目によって、バビロンの捕囚に遭っている。負い目による恐れ。
　パウロはそうであったが、彼は負い目を持っていなかった、神の恵みがあるから。（1テモテ）
　もう一つは、神を敬っているということだけで反対されるその勢力である。
　 パウロの宣教旅行。

[5] https://www.blueletterbible.org/Comm/smith_chuck/SermonNotes_Isa/Isa_40.cfm